



「シン・読書感想文」

高等遊民になれなくても

〓森見登美彦『恋文の技術』を読んて〓

美学柊

手紙を書きたくなつた。

母に。友に。推しに。

それに色々思ひ出した。

幼稚園児の頃、突然思ひ立つて友人と翌日手紙を交換する約束をすることがあつた。可愛い便箋、きらきらとしたシールとともに、毎日会話しているような中身の無い内容を交わしあつた。

同じように思ひ立つて、父親にも何度も手紙を書いた覚えがある。内容は正直全く覚えていないが、何度目かのとき、「初めて『お仕事頑張つてね』以外のこと書いてくれた!」と喜ばれたことだけ深く記憶に刻まれている。

いつからか、手紙を大仰なもののように感じていたのかもしれない。普段は言えない感謝や、心の奥底にある本音を届けるものだと思つていたのかもしれない。

でも、違つた。人柄溢れる筆跡が手元に残り続けることや、相手の反応を想像しながら丁寧に言葉を紡ぐ時間に価値があるのだ。

そんなことを思ひ出させてくれたのが、森見登美彦氏の『恋文の技術』である。

相手に自分の言葉で何かを伝えようとする。一世一代の告白でも、心に秘めた想いでも、一緒に行きたい場所のことでも、不意に思ひついてしまった駄洒落でも。それを文字に起こす。それが手紙だ。内容は二の次。阿呆が書いたようないものでもないものでも、くだらん俗世の噂話でも良いのだ。必ずしも日頃の感謝を染み込ませる必要はない。

ここ最近、毎日のようにエントリーシートを書いている。仕事体験、インターンシップ、本選考を毎日のように悪夢としか思えない量のメールが知らせてくれる。もちろん、プログラムの内容や日程を考慮したうえで、厳選し、エントリーシートを書いているわけだが、それでも心労が絶えない。常に、エントリーシートを書かなければ!と頭の片隅で考えていることが辛

い。この本で一番強く共感、どころか共鳴したのは「高等遊民になりてえ」という言葉であった。

辛いことに変わりはないが、この本を読み、エントリーシートもある種手紙かもしれないと思った。主人公も就活生としてエントリーシートを書いている描写もあり、なんだか痛みを共有できたような気には……、なっていないが、まあ、皆そうだよな、苦しいよな、と思った。就活も貴重な機会だから楽しめとか言えるのは、当事者時代の心を忘れた大人だけである。まあ、その心を忘れるぐらい今は充実しているなら、それで結構。

大学一年生の頃、入学式の翌日だか翌々日だったかの登校日のことであつたと思う。先生に、文学部は就職に弱いと言われていますがうんぬんかんぬんという話をされ、悲しくなつた。別に、就職に不利な学部に入つたことを嘆いていたわけではない。ただ、学びたいこと、勉強したいことがあつてこの大学、この学部に入學したのにもかかわらず、大学という場所を就職という軸でしか捉えていないような言葉を、投げられたことが、それも私の学びたいことの道標を示してくれるはずの先生から投げられたことが、とても悲しかった。

ただ、エントリーシートを手紙だと思えば、文学部は相当強そうだ。なにしろ、やれ小論文だ、やれ感想文だと、とにかく字を書きまくっている学科である。私が思っているだけか、文学部生が皆思っているかは知らないが、自らの心を言葉として昇華することに長けている人が多い。好きで学んだことを、就活のために役立てるのはなんだか癪で、それこそ就職のために大学に入學した人と同じになつてしまっているが、まあいい。使えるものは何でも使おう。とか、意外とこれで良いんじゃないかという気もしてきた。要するに、就活のために学ぶのではなく、好きで学んできたことが就活に役立てばめっけもんだと思えばいいのではないか。うーん。これはこれで超絶前向き就活講師的な人が言いそうな文言でなんか嫌だな。

最終的に主人公が確立した恋文の技術に「恋文を書くとうとしないこと」というものがあつた。エントリーシートも同じかもしれない。

文学部で良かったと思うのは、文章を書くことを苦に感じない瞬間だ。たつた一つの思いつきから言葉によって世界を広げていく作業は楽しいものだ。どう書けば読み手は面白いと思うだろうと考えることも同じく。エントリーシートにおける自己主張と謙虚さの塩梅は絶望的にわからないが、そんなことは一度脇にやり、読み手を楽しませるぞ！という意気込みで、そう気負わずに手紙を書くように、エントリーシート作成に乗り出してみようか。私には、それができる文学部生として学んだ力が身に付いている。そんな風に少し自分を信じられた。

言葉や文章の力を見失ったとき、胡乱に感じたときに読むと、力の湧いてくる本である